

はじめに

本書は『日本国語大辞典』をよむ」をタイトルとしているが、どのような「目的」で、どのようによんだのか、などについてまず述べておきたい。

二〇一〇(平成二十二年)十二月に三省堂から『そして、僕はOEDを読んだ』という本が出版された。アモン・シェイ(Ammon Shea)という人物が書いた『Reading the OED: one man, one year, 21,730 pages』という本を田村幸誠が翻訳したものだ。「OED」は『The Oxford English Dictionary』のことで、一九八九年には二十巻から成る第二版が刊行されている。この二十巻の「OED」、総計二万七三〇ページを、一人で、一年間をかけて読み通したという本が『そして、僕はOEDを読んだ』である。

『そして、僕はOEDを読んだ』は、ある月曜の朝に六十キログラムを超える二十巻のOEDがアモン・シェイのアパートに届くところから始まる。『日本国語大辞典』第二版全十三巻(十四巻は索引等が載せられている別巻なので、これは除く)は量ってみると、そこまでの重量はないが、総ページ数は二万ページぐらいなので、こちらはますます「OED」二十巻にちかい。

『日本国語大辞典』第二版(二〇〇〇～二〇〇二年、小学館)は、現在刊行されている国語辞書で最大規模のものである。この『日本国語大辞典』第二版(以下第一版のことを話題にする場合のみ版の別を示す)

のみが大型辞書とってよい。『広辞苑』を大型辞書とっている人がいるかもしれないが、『広辞苑』は中型辞書である。

アモン・シェイは一年間で「OED」を読んだことになっているが、二万ページを一年間で読破するためには、一ヶ月に一六〇〇ページ以上を読まなければならない。アモン・シェイは「一日に八時間から一〇時間、OEDと向き合っていた」（十六ページ）とのことであるが、大学の教員である筆者にはそのようにすることはできない。実際にきちんとメモをとりながら『日本国語大辞典』をよみ始めたのは、二〇一五（平成二十七年）年九月二十四日からであるが、二〇一六年四月一日から二〇一七年三月三十一日まで勤務先の大学から「特別研究期間」を認めていただき、授業担当や会議等から離れることができた。その期間を有効に使いながら、よみ進めていった。

右ではもう『日本国語大辞典』をよむことになってしまっているが、筆者がどうしてそのようないわば「暴挙」をしようと思ったかについても少し説明しておこう。筆者はこれまでに『漢語辞書論攷』（二〇一一年、港の人）、『明治期の辞書』（二〇一三年、清文堂出版）、『辞書からみた日本語の歴史』（二〇一四年、ちくまプリマー新書）、『辞書をよむ』（二〇一四年、平凡社新書）、『超明解！ 国語辞典』（二〇一五年、文春新書）など、辞書を「よむ」ということをテーマとした本を出版させてもらっている。古辞書から現在出版されている辞書まで、さまざまな辞書をよみながら、いろいろなことを考えた。そうしたいわば「経験」に基づいて『日本国語大辞典』をよんだら『日本国語大辞典』がどのような辞書にみえるか、ということがまず考えたことだ。ただし、よんでみよう、と思った時点で、よんだら自分がどうなるか、ということは予想がついていなかった。「自分がどうなったか」は「おわりに」で述べることにする。

『日本国語大辞典』を「よむ」といっても、どのようなよみかたをするかによって、それに必要な時間も変わってくる。そこで、二〇一八（平成三十）年の七月ぐらいいには、『日本国語大辞典』をよんだ結果をまとめ終わるという目標を設定し、それに合わせたペースを保つように心がけた。よむ時間をもっと費やせば、「よみ」はまた変わってくるだろう。気がつくことも当然増えることが予想される。とにかく、右のような目標のもとに『日本国語大辞典』をよんだ。

ここで、本書で使う、筆者の用語を説明しておきたい。筆者は辞書は「見出し＋語釈」という基本形式に基づいて記述されていると捉えることにしている。これは過去の辞書にも現在刊行されている辞書にもあてはめることができる。具体的に説明しよう。

きりつぼげんじ 【桐壺源氏】〔名〕（「源氏物語」を、最初の桐壺の巻だけで読むのをやめてしまう、ということから）中途半端でいいかげんな学問、教養のこと。

右で、「きりつぼげんじ」の部分が「見出し」で、それ以外の部分が「語釈」ということになる。「語釈」は一般的には（語（句）の意味の説明）であるが、それをもう少し広く、（見出しとなっている語（句）にかかわる情報全般）ととらえたい。見出しとなっている語について何か記されていれば、それが「語釈」ということだ。「キリツボゲンジ（桐壺源氏）」になぞらえれば、「第一巻日本国語大辞典」（＝『日本国語大辞典』をよむといいながら、第一巻だけでやめてしまう）というようにならないようにしないといけないという戒めをこめた。本書では、「語」を示す場合は「キリツボゲンジ（桐壺源氏）」のように、片仮名を鉤

括弧に入れ、必要があれば、語義理解の補助となるように丸括弧に漢字列を入れて示す。『日本国語大辞典』の見出しを示す場合は、そのままのかたちで示す。「意味」は一般的にも使われる語であるので、「語の意味」は「語義」、「文の意味」は「文意」と呼ぶことにし、へ～に入れて示す。

さて話を戻すが、「見出し＋語釈」全体が辞書の一つ一つの「項目」である。筆者のいう「見出し」は英語辞書学では「headword」あるいは「lemma」(レマ)と呼ぶということを大学の同僚の大杉正明先生に教えていただいた。『日本国語大辞典』は見出しとともに、見出しとなっている語が実際に使われている文献の名前と実際の使用例とをかなり丁寧にあげている。この使用例は必ず「よむ」ことにはしなかった。必ず「よむ」のは「見出し」と「語釈」とである。

先に述べたように、『日本国語大辞典』は現在刊行されている国語辞書の中で、最大規模のもので、唯一の(多巻)大型辞書である。したがって、「相手にとって不足なし」であるが、『日本国語大辞典』を批判することが本書の目的ではない。時には批判的にみえるような書き方をすることがあるかもしれないが、それはいわば『日本国語大辞典』の今後、国語辞書の今後のために、こういうことはありませんか、という「問題提起」のようなものだと思っていたきたい。

目次

はじめに……………1

序章……………10

小型辞書・中型辞書・大型辞書の違い

10

初版から二版まで

24

第一章 まず「凡例」をよむ……………40

「編集方針」について

40

見出しについて

51

漢字欄について

64

語釈について

74

出典・用例について

81

方言欄について

88

語源説欄について

94

発音欄について

99

辞書欄・表記欄について

102

第二章 見出し……………104

対語に注目する

104

オノマトペあれこれ

110

動植物名の見出し

125

わたしは誰でしょう？

130

再び「語源未詳」

139

文豪のことば

144

懐かしいことば

152

レストランお江戸のメニュー

156

外来語今昔

159

いろいろな学問

164

できないこと

168

謎のことば ガトフフセグダア

172

走れメロスとメロドラマ

176

夜光の貝と夜光貝 179

ギロップンでシースー 183

バリアント 187

漢字の意味がわかりますか？ 196

さまざまなメゾン 198

お隣さん 202

発音が先か文字が先か？ 205

とまどうペリカン 209

「フルホン」と「フルボン」 212

ユニセフとユネスコ 216

謎の専門用語 220

用意と準備 223

「に同じ」 227

いろいろな「洋」 230

ライガーとレオボン 234

第三章 語釈について……………238

この語釈でよろしいでしょうか？ 238

第四章 使用例について……………277

使用例をどう活用するか？ 277

小型辞書の作例と使用例との違い 289

使用例が載せられていない見出し 301

第五章 出典について……………313

「凡例」の検討 313

出典からわかること、推測できること 317

第六章 辞書欄・表記欄について……………348

「凡例」の言説の検討 348

辞書欄・表記欄から何をよみとるか？ 359

終わりに……………374

附録 『日本国語大辞典』にない見出し……………388

索引 本書で扱った主な項目……………411

序章

小型辞書・中型辞書・大型辞書の違い

「小型辞書」というと、ポケットに入るような大きさのものを指していると思う方がいるかもしれないが、そうではなくて、ごく一般的に使われているものが「小型辞書」だ。よく使われていると思われる辞書の見出し数、ページ数を示してみよう。

岩波国語辞典(第七版新版・二〇一一年)……………	約六万五〇〇〇	一六二五ページ
三省堂国語辞典(第七版・二〇一四年)……………	約八万二〇〇〇	一六九八ページ
集英社国語辞典(第三版・二〇一二年)……………	九万五〇〇〇	一九八四ページ
新選国語辞典(第九版・二〇一一年)……………	九万三二〇	一四二五ページ
新明解国語辞典(第七版・二〇一二年)……………	七万七五〇〇	一六四二ページ
明鏡国語辞典(第二版・二〇一〇年)……………	約七万	一八八六ページ

ページ数は、一五〇〇ページ前後、多くても二〇〇〇ページ未満、見出し数は六万から九万の間といったところである。辞書が改版されて販売される時には、前のものよりも見出しがこれだけ多くなっています、というように宣伝されるが、もしもページ数を変えずに見出し数を増やしたら、一つの見出しあたりの「情報量」は減ったことになる。

そう考えるとわかるが、辞書はその辞書に見出しが幾つあるか、ということよりも、見出しにどのくらいの「情報」が配されているか、が大事だ。そして、より大事だと筆者が考えるのは、見出しがバランスよく採られているということである。

辞書の項目のバランス ①語種のバランス

「バランスよく」は日本語の語彙に対してバランスよく、ということだ。「日本語の語彙」というと少しわかりにくいかもしれない。「語彙」とは何らかの観点に基づいて語を集めた集合のことをいうが、ここでは日本語として使っている語の総体が「日本語の語彙」と思っていた方がいい。

車道を安全に走るためのインフラ整備として、国土交通省と警察庁が、自転車専用通行帯や通行位置明示の整備に音頭を取り始めています。(『朝日新聞』二〇一七年八月二十六日「オピニオン」面)

右は現在目にする、ごく一般的な「文」であるが、この「文」は「シャドウ(車道)」「アンゼン(安全)」のような漢語、「ハシル(走)」「トリハジメル」のような和語、「インフラ」のような外来語から成り立っている。

る。正確にいえば、「インフラ」は英語「infrastructure（インフラストラクチャー）」（Ⅱ下部構造）の略語である。「インフラ」で、その「インフラ」が漢語「セイビ（整備）」と結びついている。したがって、「インフラセイビ」全体を、外来語（の略語）と漢語との複合語とみるべきで、これは混種語ということになる。和語は日本でできた語、漢語は元来中国語であった語、外来語は中国以外の地域でできた語で、どこでその語ができたかに着目した呼称である。そして、それらの「混種語」もある。

和語、漢語、外来語によって「日本語の語彙」が形成されている。それぞれがどのくらいの割合を占めているか、ということは簡単にはつかみにくい。和語を多く使う文章では、和語が五割ぐらい、漢語が三割ぐらい、外来語が二割ぐらいかと思うが、漢語を多く使う文章では、漢語が五割ぐらいで、和語が三割ぐらい、外来語が二割ぐらいになるだろうか。和語が五割か漢語が五割か、はだいぶ異なるが、「和語＋漢語」が八割ぐらいということだ。仮にそれを「日本語の語彙」の「語種による内訳」だとすれば、それをだいたい反映しているのが「バランスよく」だ。「新語に強い」ことを謳うあまりに、外来語が見出しの五割を占めている、ということになれば、日本語の辞書としてはバランスがよくないことになる。

辞書の項目のバランス ②標準語形と非標準語形 俗語

「ヤハリ」「ヤッパリ」「ヤッパシ」「ヤッパ」という語を使って説明してみよう。「ヤハリ」は「書きことば」で使うことができる。「ヤッパリ」も「書きことば」で使うことはできそうだが、少し「くだけた感じ」を伴なう。会社の会議で使う文書に「ヤッパリ」は使いにくい、というのが筆者の「感覚」だ。こうした「感覚」には個人差があるが、言語使用者に共通する「感覚」も、もちろんある。「ヤッパシ」「ヤッパ」は「書きことば」では使うことができない、というのが共通の「感覚」ではないだろうか。「話しことば」であっても、「ヤッパ」は使わないという人もいるだろう。

「ヤハリ」を「標準語形」とみると、「ヤッパリ」はその標準語形から少し離れた語形、「ヤッパシ」「ヤッパ」の順で、標準語形から「距離」がある、というのが多くの人の「感覚」ではないか。そうとらえた場合の「ヤッパリ」「ヤッパシ」「ヤッパ」が「非標準語形」だ。

「話しことば」では使うが「書きことば」では使わない、という語形すべてが「非標準語形」ということにはならないとみることもできるが、「標準」には「書きことばで使う」ということが何ほどかは含まれ、「書きことば」で使うことができる語で、「公性Ⅱフォーマリテイ」を帯びた文書はつくられる、ということとはたしかなことであろう。辞書を一冊よむとそういうことが次第にはつきりと意識できるようになるし、そういうことを意識しながら辞書をよむと得られるものが多いように思う。辞書をまるまる一冊よむということは、「日本語の語彙」全体に（まがりなりにも）目を通すということだ。そうすることによって、自身が日常的に行なっている言語生活のなんらかの「偏り」にも気づく。この語は見たことがない、と思った語が使われている「文字社会」が自身から遠い「文字社会」であることになる。

そういうわけで「非標準語形」Ⅱ「俗語」ということでもないが、今仮に「非標準語形」と「俗語」とはだいたいの重なるとみておくことにする。小型の国語辞書は「情報」を効率よく整理するために、さまざまな符号を使っているが、「俗」というようなかたちで、その見出しが「俗語」であることを示すことが多い。右の例でいえば、『三省堂国語辞典』第七版は「やはり」「やっぱり」「やっぱし」「やっぱ」「すべてを見出しにし」「やっぱし」「やっぱ」に「俗」符号を附し、「やっぱり」は「話しことば」であることを記している。『日本国

語大辞典』も四語形すべてを見出しにしている。『日本国語大辞典』の「凡例」については、第一章で詳しく検討するが、「俗語」というような、語の評価は示していない。見出し「やっぱり」には「やはり」の変化したものの、「見出し「やっぱし」には「やっぱり(矢張)」の変化した語」、「見出し「やっぱ」には「やはり(矢張)」と同じ」と記すのみである。

「ヤハリ」に促音が附加された語形が「ヤツパリ」であるので、それを「やはり」の変化したものと説明するのは妥当だ。その「ヤツパリ」から「ヤツパシ」が生まれたことは確かであろうから、「ヤツパシ」を「やっぱり(矢張)」の変化した語」と説明するのも肯ける。「ヤツパ」は「ヤツパリ」あるいは「ヤツパシ」の末尾が省略された語形であるのだから、「やはり(矢張)」に同じではなく、「やっぱり」あるいは「やっぱし」の変化した語」と説明すると、一貫性があるのではないだろうか。これを「ヤハリ↓ヤツパリ↓ヤツパシ↓ヤツパ」と図式化すると、標準語形「ヤハリ」から非標準語形が生まれる「道筋」もわかり、「非標準」の「非」の程度もつかみやすい。

辞書にとって「一貫性」は重要だ。小型の辞書は説明に使うことができる紙面が限られているので、先に述べたように、さまざまな符号類を駆使して効率よく「情報」を提示する工夫をしている。したがって、全体の記述に統一がとれていて、一貫性があることが重要になる。「読み手」は限られた「情報」を真剣によみとろうとするので、統一がとれていなかったり、一貫性がなかったりすると、迷う。あるいは気になる。右の『日本国語大辞典』の記述で、「やっぱ」の「やはり(矢張)」に同じ「が一貫性という点でどうか、ということ」を述べたが、見出し「やっぱり」には「変化したもの」とあり、見出し「やっぱし」には「変化した語」とあるのも気になる(注：傍点筆者)。オンライン版『日本国語大辞典』については後に述べるが、そのオンラ

イン版で調べてみると、「変化したもの」「変化した語」両方がある程度の数ずつ使われていることがわかる。こうなると、「もの」と「語」には何らかの違いがあるか、ということがさらに気になってしまふ。両者に違いがないのであれば、どちらかに統一一されているとよけいなことを考えなくてよい。

「ヤハリ」「ヤツパリ」「ヤツパシ」「ヤツパ」については、小型辞書である『三省堂国語辞典』第七版も『日本国語大辞典』と同じように四つの語形すべてを見出しとしていた。しかし、「ヤハリ」だけを見出しにするとか、「ヤツパ」は見出しにしないとか、いろいろな「選択」が可能だ。非標準語形をどのくらい見出しにするか、は辞書の見出し選択の一つの観点になるはずだ。

辞書の項目のバランス ③ 標準語形と古語

小型の国語辞書が現在使われている語、すなわち現代日本語を見出しの中心にすることは当然のことであるが、それでもいわゆる(一定の制約下に、何らかの工夫をしながら)「古語」を見出しにしている辞書、あるいは見出しにはしないまでも古語に言及している辞書は多い。例えば、『岩波国語辞典』は「第七版刊行に際して」という文章中で次のように述べている。

『岩波国語辞典』初版は、高校で習う程度の古典作品の事を念頭に置いて、現代語・古語両用の辞書として出発した。しかし古語項目は第五版から涙を飲んで削った。小型辞典の宿命的制約である分量の観点で、移行行く現代語の実相に関する増補のために紙幅を産みだしたからである。その版の刊行の辞に述べたとおり、古語での意味を心得ることが時として現代語の理解を深める面がある。そういう場合